

女性医師コーナー

初期臨床研修医について

広島市立広島市民病院内科 荒木 康之

本年4月に広島県医師会常任理事になり、勤務医担当と同時に女性医師部会の副担当になったことから今回、女性医師コーナーの文章を書くことになりました。

現在、広島市立広島市民病院（以下広島市民病院）の研修管理委員会委員長として、初期臨床研修医（以下研修医）の教育を担当しています。広島市民病院には平成16年の臨床研修必修化以後現在まで63名の研修医を採用、うち女性は21名でちょうど1/3に当たります。広島市民病院の研修では、ER型救急を行っており、急患、重症患者が多く、肉体的にハードなので、当初、女性医師の体力面を少し気にしていましたが、実際には、女性ということだけで特に問題になる研修医は存在しなかったと感じています。そのことから、女性医師のことというより、研修医の採用、教育という観点から、日頃感じていることを話します。

まず感じることは、研修医の彼らは、非常によく病院、指導医をみていることです。学生の見学の案内をしても、この病院がどんな病院であるか、2年間で何を勉強できる病院であるか、研修医の指導方針についてもよく観察しています。学生から選ばれる病院であることは病院の存続にかかわる大問題です。学生が研修病院を選ぶポイントはたくさんありますが、彼らのニーズがどこなのかを常に把握しておくことが大切です。一般病院が魅力のある研修の場を提供できれば、優秀な研修医を採用することも間違いありません。研修内容や指導体制など総合的に評価されるのですが、何より現在の研修医が満足して研修生活をおくれているかが最も大切な要素です。現在の研修医の満足度が

そのまま学生の人気につながります。研修医の口コミ情報は研修担当からすると、とても怖い情報で、学生にとっては欠かせない情報でしょう。

学生、研修医のニーズとして当然、研修医に十分な症例を提供できることは最も大切なことですが、一方、教育的な視点が欠かせないと考えています。いま感じている教育の基本は、学生ではなく、医師であるという視点の大切さです。大学卒業して医師国家試験を合格したというものの、学生意識が抜けない研修最初の時期に必ず言うことですが、「医師になって29年の私と医師になって1ヶ月目の君たちに資格の差のないこと、せつかくの2年間を有意義に過ごすかどうかの選択は君たちにある。受け身ではなく、自ら進んで仕事をするのが大切。」と話しています。また、「そのための環境を整備することが研修管理委員会の仕事である。」とも話します。成人教育の場合、上から教えられるという受け身の教育ではなく、自発的に学ぶことが大事であるといわれていますが、研修医教育においても、そのことが非常に重要と実感しています。医師として行わなければならない仕事を与えること、そのうえで能力や興味にあわせた個別性に配慮すること、強制しすぎないこと、教育的な環境を与えることを考えて、研修システムを考えています。

女性医師とは関係ない話になってしまいましたが、研修医教育の現場ではあまり、男女を意識していないのが実態で、それよりは研修医の個性のほうの方が重要という印象です。いろいろな個性の研修医が伸びていける病院が理想だと思っている日々です。

女性医師のためのよろず相談

どんなことでも気軽にご相談ください。(再就職、再教育、子育て、保育施設等)
回答の返信先(Eメール、FAX番号、電話番号、郵送の場合は住所)を明記して下記に
ファクス又はEメールで送信してください。

あて先：広島県医師会女性医師部会(学術研修課)
FAX番号：082-293-3363
Eメール：gaku@hiroshima.med.or.jp